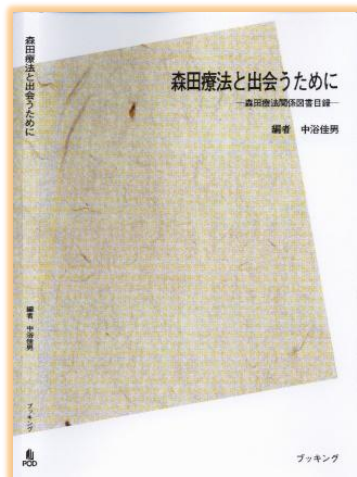


大槌町での図書館立ち上げ

中浴 佳男

—成田市国際医療福祉大学図書館・生活の発見会—



中浴氏は平成13年に森田療法・生活の発見会で「森田療法と出会うために」の編集をされ、森田療法関係図書目録を出版されました。日本語のCL図書も案内され、以降インターネットでもCL図書を紹介していただき、昨年出版された「シニア世代の生き方革命」を加えていただきました。

http://moritalib.life.coocan.jp/book/booksour_folder/497_folder/book497.html

<http://moritalib.life.coocan.jp/category/cate920.html>

同氏が昨年一年間、東北被災地、大槌町に図書館立ち上げの任務を担ったときのブローカー出稼ぎ司書の大槌日記一から一部掲載いたします。

<http://ootsuchinikki.cocolog-nifty.com/blog/>

昨年11月末で被災地岩手県大槌町での図書館立ち上げの1年間の任期が終了し、地元に戻り、1月からは国際医療福祉大学成田キャンパス図書館にて新たな仕事を始めています。

2018年12月20日(木)

東日本大震災のあと、大槌町には遠方から多くの支援の人が入りました。こうした人たちを現地では「旅の人」と呼ぶそうです。私は「旅の人」は2類型に分かれるのではないかと考えています。

1 町内に一定長期間住み込み、復興関連の仕事をする人たち

私のような役場の任期付職員、他自治体からの派遣職員、土木建設工事にあたる人たち、その他で、多くはその働きにより給与の支払いを受けます。

2 遠方より町に通ってくるか、短期間の滞在でさまざまな支援を行う人たち

被災直後からさまざまな形のボランティアが入りました。これらの人たちを指します。原則として給与などの見返りはありません。私がいた期間中は、地域に入って住民との交流を深めながら、いろいろな細かなお手伝いをするために定期的に通ってきている学生ボランティアがおりました。また年に数回、または数年に一回通ってきて無償で慰問にあたる著名人や芸能関係者がおりました。

1の類型にあたる人たちも、2の類型にあたる人たちもそれぞれ町の復興に大きな役割を果たしてきました。ただ、2の類型の人たちでは見えない町の細かな事情が1の類型の人たちから見える部分があったと思います。

大槌町は震災前人口16,000人を超える町であったのですが、現在は人口12,000人を切りかけています。被災によ

◎大槌町文化交流センター・図書館(愛称「おしゃっち」)のライトアップです。これからもおしゃっちが町に文化の明かりを灯す存在でありますように



り町外に移転した人たちの一定部分が、移転先での生活基盤が確立したため、帰ってこなくなったのが原因の1つだと言われています。

この人口減少は町の財政的な体力の低下を生みます。わが国自体が少子高齢化による人口減少に今後、見舞われるわけだし、サイズにあった行政をやっていけばよいのではないかとも思います。しかしながら、図書館のような施設では2018年6月30日のブログで指摘させていただいたような「サイズ感」の面で不利となるのは否めないところでしょう。

このような現状に対して、町も手をこまねているわけではなく、Uターン、Iターン促進のための施策を考えているようです。町から一度出て行った人が震災後、ふるさとのために、Uターンして戻ってきた事例はいくつか聞きました。ただ、今のところIターンの事例はあまり聞きません。「旅の人」たちも大半は復興が進めば、やがては去って行くことになるようです。町の将来を考えれば、異文化の人たちも受け入れて、もっとIターンを促進する必要があるように思います。


「旅の人」とは別に、今も全国各地の人から金銭的、物的支援の申し出があるようです。図書館でも、そのような支援の申し出を数多く受けました。

しかし、復興が進めば、「旅の人」の多くは去り、支援の申し出も少なくなると思われます。特別視されなくなった時が本当の意味で復興の仕上がりであり、それからが町の本当の実力が試される時かと思います。

最後に2018年8月17日のブログで紹介した「大槌新聞」がキャッチコピーで使っている文言を捧げたいと思います。

「大槌は絶対にいい町になります。」

cqa15535@nifty.com（千葉県千葉市）

 [目次へ戻る](#)